

宏

野間時代の文学

岩波書店

進とは何か？ 野間は、まことに大きな羽をばたばたと音をたてて眼の前
してはいないと言ふ。現代は、この喪われた時代、また世界はな
ことを私は、もちろん、はたしてこの時代、創造が或は創造を行う力が、
ちから、車のタイヤを、その車を走らせる力、抜きとられてしま
、しかもその快癒、その苦痛、その苦悶、その苦悶、その苦悶、その苦悶、
まったく容易では、野間は、まことに大きな羽をばたばたと音をたてて眼の前
何かとの間を発する音、野間は、まことに大きな羽をばたばたと音をたてて眼の前
る怪鳥のように見えると、私は言うほかはない。

それはたしかに怪鳥であつて、見なれない姿をしたどこか、他方の世界から或は他界から
もよい、他界から道を見失ひ、迷ひこんできたものと言つてもよいだろう。多くの人々
ては自分の眼の前に見ることのでき、それだけではなくごく親しい關係にあつたにかか
いまは、その姿を、見ることもなくなつて久しいが故に、もしそれが姿を現したりした
ただただ、とまどうことには、野間は、まことに大きな羽をばたばたと音をたてて眼の前
らにまた、多くの創造という言葉をつたへた口にし、創造を売り物として売買してきた

野間 宏
新しい時代の
文学
岩波書店

新しい時代の文学

一九八二年九月三〇日 第一刷発行 ©

定価一八〇〇円

著者 野間 宏 ひろし

発行者 緑川 亨

発行所 〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目
鉄岩波書店

電話 〇三・六四二二
振替 東京六二六四〇

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

目次

I	現代文明の危機のなかの文学	一
II	創造する力とは何か	五
III	現代社会の重層性	二三
IV	文学の全体性	一五

あとがき

I

現代文明の危機のなかの文学

I 現代文明の危機のなかの文学

—

巨大な工業生産活動によって自然に於ける循環が極度に破壊され、ついにその限度に達しようとして人類の生存がおびやかされているとの警告をすでに多くの人々がきいている。日本の文学者もまた、当然のことであるが、それを放置することは出来なかったし、また実際に放置しはしなかった。

自然から生れた人間が、自然を破壊するという、自然と人間との乖離。そこから生じる人間にとっての、これまでの人間の経験の一切を越える、まず理解しがたい、したがってその解決もまた、きわめて困難な事情が人間の上に訪れてきている。そしてこれをめぐる年月をかけてつけてきた討論は、じつにけわしい道を行かなければならない、人類のこれからの歩みを文学者に思い知らせる。

それは危機というこれまでしばしば使われてきた言葉によっては、とらえられないような、巨大な規模と複雑な解きがたい組み合わせをそなえて、人類の上に落ちて来ているのである。文学がそのすぐ前に立たされている問題として、文学はそれに接近し、それがどのような姿、形を

とって現れているか、さらに将来どのような姿、形に変化することになるのか、その構造と変換、その移動、そしてその終局などについて明らかにし、それが如何なるものであるのかを見、はたしてその解決は可能か否か、可能であるとすれば、如何なる方法をもってするのかを、その文学理論をもって問いつめなければならぬことを文学者は心底に収めてきた。

しかし文学もまた自然と人間の極度の乖離によって生じたその深い裂け目のただなかに落ち込み、そこから匍い上り抜けだす方途を見出すには、すでにその険しい狭間の瘴氣しやうきにあてられすぎていると感じなければならなかった。日本文学は、文明にかかわる機能を欠いてから、すでに久しいのである。

まず、このことを明らかにして、日本文学は、自身にそなわる一切の力を投じて、自身の力の限界を測定し、それ自身を変えなければならないだろう。

人類の生存がおびやかされているこの警告、それはヨーロッパの終焉、或は現代文明の危機の警告とも言われる。このヨーロッパの終焉と言われ、或は現代文明・文化の危機とよばれるものに、かわかることを文学が避けることは出来ない。人間の前に訪れている問題がいかに見定めがたいものであろうと、また絶望をもたらすものであろうと、それに眼をふさぐなどということに文学はなかったし、またないからである。

もともと人間はその一人一人がたえずかつてないその生を生きその死を死ぬといつてよく、その一人一人の相異なる生とそして死を、その辺りに見えかくれる見定めがたいおびただしい幻覚や幻聴を見つけたし、それを取り払い、見とどけてきたのである。文学は人間一人一人の欠如しているところを見きわめ、そこに入り込むことによって、その生死の全体に迫るのである。

しかし人間は決してただ人間自体の存在によって自己完結し、その生を生きその死を死んでいゝるものでないことは、説明するまでもないことである。人間は人間を取り巻くもののなかにあってその生を生き、その死を死ぬのである。「人間と人間を取り巻いているものを、同時にとらえることこそは、私が作品を書くにあたって中心においている一つの目標であった」とかつて私は書いてゐる。人間と人間を取り巻くものを、それが動いてゐるままに同時にとらえることは、私が文学創造を行う時、その中心においてゐる最も重要な目標の一つである。「戦争は人間と人間を取り巻いているものの関係が、決して人間と人間を置く場所との関係というような静かなものではなく、またそれ以前の文学のなかで明らかにされてゐた人間と環境との関係というようなものではないことを明らかにした」とも私はかつて「感覚と欲望と物について」という文章のなかで書いてゐる。

とはいへ、いまや、戦争そのものをその内につつま込んでゐるとでもいうようなまことに巨大

な変動を人類が迎えていると警告した人たちは、人間と人間を取り巻く環境、この二つを結んでいる関係が、これまでのあらゆる学問、芸術、文学が追究してきたところとは非常に異なった構造をもつものとして、成立していることを明らかにしてきているのである。生物学に物理学を導入し、生物の生命活動の構造と機能を分子の段階でつきとめることに成功した生物物理学、分子生物学を始めとする現代の諸生物学は、生物の生命活動と環境との密接な相互作用、その相互作用にいささかでも損傷が生じる時、生命活動の様態の大きな変化を見なければならぬ程の密接な相互作用、その相互作用の中心のところに置かれているものを科学の理論として、引き出す入口に立つのに成功しているのである。

最初に私が明らかにした自然と人間の極度の乖離によって、人間の落ち込む難局についてはよく警告を発したのは、すでによく知られているように、分子生物学者を中軸とする現代の生物学者たちであって、私は、ジャコブ、バーネット、テイラー、ルネ・デュボス、バリー・コモナー、ルリア、大沢文夫、寺本英、野島徳吉、柴谷篤弘その他の名前をここにかかげておかなければならない。生物の生命活動と環境の間の密接な相互作用を説明するにいたった生物物理学者、分子生物学者、生態学者、免疫学者などをはじめとする現代生物学者のほかには、現在、人間の前におかれ、日々、人類に迫りつづけ、その個としての生命の死と、その種としての生命の死をもた

I 現代文明の危機のなかの文学

らそうとしている二十世紀末から二十一世紀にかけてのじつに重大な問題の所在を提示することは不可能なことだったのである。

一九八二年、ナイロビで行われた人間環境会議に於ては、南と北の立場の大きな相違がうちだされながら、討議のなかで提出された環境問題は、加速度を増して深刻化しているという結論に達している。そこで明らかにされた内容はおおよそ次の通りである。

(1) 地球の砂漠化 伐採と焼畑農業による森林の喪失により、砂漠化した地域は開発途上国においてとくに一挙に拡大され、これによって急激な生態系の変化がもたらされようとしている。

(2) 生物の種の死滅 マイアースもその著書『沈みゆく箱舟』(林雄二郎訳、岩波書店)において論じているように、インドネシア、フィリピン、アマゾン等に顕著に見られる、先進工業国の企業による森林の伐採——利潤を中心にした考えによって植林をすることなく放置したままの伐採によって、生物の生きる場が奪い取られ、また植物の発する強力な殺菌作用なども低下し、各種の生物の絶滅がもたらされ、現在、生物は一日一種類ずつ絶滅しており、八〇年代のおわりには毎秒一種類の生物が死滅することが予測されている。

(3) 異常気象 このような森林の伐採は、植物による炭酸ガスを吸収し酸素に変える操作の能力を削減させ、大気中の炭酸ガスの量の増加によってもたらされる温室効果によって異常気象が

現れている。

(4) 熱汚染 この異常気象の問題は同時に全地球上の熱汚染の問題をひきおこす原因でもある。二〇年後に推定される六〇—六五億へ増加する地球の人口、その増加する人口によって使用されるエネルギーは熱に変換し、地球の温度を上昇させるだろう。その上昇の様態は、温帯地域を二—三度とすれば極地において七—一〇度の上昇が考えられており、この熱汚染によって南極、北極の水が溶け、海水の増大によって地球上の陸地のかかなりの部分が水没することは必然的であろう。

また後述するように、開発途上国における水質の汚濁化、酸性雨等は以前より認められていたことであるが、以上のような砂漠化の拡大、生物、微生物の死滅、先進工業国による環境破壊は、南側の広範囲な地帯の人々に悪影響を及ぼしつつあり、それは一九八〇年代の大きな問題になるうとしている。

人類の直面しているこれらの環境破壊による生存の危機の問題を、核戦争による人類の死滅の危機の問題と同時に捉えるという視点を私たちはもととするものである。この問題を自らの問題として全人類がひきうけ、解くことによって新しい生と死を自らのものとする全人類の真に創造的な時期を迎えるところに私たちはあるといわなければならない。

I 現代文明の危機のなかの文学

しかしいま、人間の行く手をさえぎっているものは、まことに巨大であって、自然と人間の全領域にわたっており、到底文学の手におえるものではないともいえる。ことにそれは日本文学にとっては、まったく不案内な問題なのである。しかもそれはこの日本に於て、もっともきびしく迫って来いて、世界の何処よりも、その症状というべきものは、重い。しかし日本文学は、まことにそれが日本文学であって、しかも世界文学であるものとして、歩もうとするならば、むしろそれを自身の身近に誘い、導き、引き寄せなければならぬだろう。いや、それは文学が、それを、その身近に引き寄せるようなことをしなくとも、すでにそれは、向うから日本文学のなか深くに侵入し、入り込んでしまっているのである。それは日本文学を犯している。

このように考えると日本文学は、この人間の行く手をさえぎっているものの本体を見とどけるためには、自身のうちに侵入しているそれを、まず覗き込むことから始めればよいと言えるだろうか。たしかに日本文学はそうにしてこの重大な問題への接近を始める必要がある。とはいえ、このことも、またそれほど簡単なことではなく、これを、実行に移してみればすぐにもそれが解るだろう。

私はここでこのことを強調しておかなければならない。ごく最近、一、二年の間に一層大きな発展をとげた分子遺伝学、ライフ・サイエンス生命科学の実験そのものが、大きな危険を人類にもたらす可能性のあ

ることが、明らかにされてきているからである。人類の行く手に置かれている危険な爆発物を予測し、それについて警告を発する根拠となる理論を成立させた、当の分子遺伝学、また生命科学そのものが、人類の生存の危険を予告したG・R・テイラーが言うところをはるかに越えて、人類の落ち込む可能性のある難局を、むしろ引き寄せ、個人死の喪失、自然死の紛失時代を一層特徴づける大量死を発生させるもっとも恐るべき当事者になりかねないということが、見えてきはじめた故なのである。

それは一九七四年七月アメリカのポール・バーグ教授を責任者として世界の生物学者に出された遺伝子の組替え実験の危険の可能性にかかわる手紙によって明るみに出された。そしてそれはその実験中止の呼びかけの手紙により一九七五年二月、アメリカのアシロマに於て世界の学者による国際会議がひらかれた結果、厳密な安全性の条件、基準をみたす実験室と施設を用い、実験することはよしという決議の出されたというところにもよく現れている。

この実験をめぐる、この実験の大きな危険性を認める科学者と、それはあくまで危険の可能性にとどまるとする科学者との間の相違があらわになるのである。この相違の幅の大いさにより、一層、問題は深みに沈み、科学と技術、科学者と技術者にたいする疑問と不信が大きく引き起されることとなる。しかしこの問題については、科学・技術、科学者・技術者の人間及び社会にた

I 現代文明の危機のなかの文学

いする責任をふくむ問題として後で取り扱うことにしよう。

現代生物学の生命についての理論の確立なくしては、今日の人間を取り巻く、じつにけわしい環境破壊・汚染（公害）の問題を人間が見出すことが出来なかったことは明らかなことである。しかしその生命についての理論が生物の一つである人間の生命に適用され、人間の生命活動と自然のなかに形成されたその環境との相互作用がようやくにして明らかになり始める時、現在の人間の生命活動のすぐ下のところに時限爆薬ともいふべきものを人間自身が仕掛けているという不可解なことがら（しかも二十一世紀に於ける人類生存の条件がとわれる程にも切迫したその時限）が、生物学者によって読みとられるばかりになったということは、人間と自然の関係の不思議さに思いを向けさせる。

生物の一つとして人間を見るという当然のことであって、しかも非常に重要なことを、生物物理学者、分子生物学者、その他現代生物学者は明示してくれたと言うべきである。このことを多くの人間はまったく悲しむべきことではあるが、長い年月忘却してしまっていたのだ。とはいえ、私はもちろん人間を決して生物学的にのみとらえようとするところにとどまろうとするものではない。生命科学が生命について解明したところは、そのごく一部にすぎないということを、私は明記しておかねばならない。しかしせっかくという言葉を私はここに使いたいのだが、折角、生

物物理学、分子生物学、現代生物学が思い起させてくれた、生物の一つとして人間を見るということ、このことを捨てて、ただただ人間と他の生物との差異・人間の持つ特異性を数えたてるというところに行くならば、それはまた、従来の地球上のあらゆる生物の全生態系の重層性のなかに人間をおくことのない人間把握のところへ、再び舞い戻ってしまうことになるかと私は考える。

繰り返すことになるが、地球が病んでいるという言葉によって示されているように、自然のうちに形成された環境は、すでに人間の生命活動の持続に適合することのないところに到達しようとしている。人間をこのような状態に置くことをもたらしたものは、何なのかと問うと、それはいまだどってきた、自然に於ける光合成を通して行われる物質の再構成と循環（水素、酸素、炭素、窒素、硫黄、燐などの諸元素の自然循環）を破壊し去り、自然と人間の乖離をもたらしたヨーロッパ文明の生成の根源のところに埋められている。これが分子生物学者をはじめとする現代生物学者の自己告発である。それはまことに大胆な自らの属するヨーロッパ文明そのものの告発、ヨーロッパの終焉、現代文明にたいする全面的懐疑と否認の表明である。

しかしヨーロッパの終焉とは何だろうか。世界の分子生物学者をはじめとしてその他の生物学者たちの提出しているところを受けて、これを私の言葉を用い、しかもそれを出来る限り、その生物学者の提示するところから離れず、またそれを越えることのないように、注意して要約する

ことにしよう。それは一言にしていえば、現代の自然科学の急激な発展とそれと結合することによって果される技術的手段の不断の改革による巨大な近代技術文明の前進を通して、あらわにされた核戦争、中性子爆弾などの新核兵器（生物化学兵器）、核産業の問題をはらむ環境破壊と汚染（公害）の問題、資源とエネルギーの問題、食糧の問題を三つの柱とする、現代文明がそのうちにかかえている問題の提出である。また遺伝により数世代後に生れてくる子供たちの健全な生命の保証はどこにもなく、その子供たちは、人間の姿とその生命活動を奪われていることが、予測される。このような問題のすぐ前に人類を導くこととなった近代物質文明の破産宣告である。

しかし近代文明・文化の成立の根拠の第一は何かと言うならば、それはなによりもまず、その文明の根底のところに置かれている人類の概念であると私は考える。その人類の概念は、他の生物との循環関係にそなえることに不足している。私はいまここでこのことをはっきり言っておきたい。もちろんこの重大な問題について私の考えがここに到達する理由については後で精密に示さなければならぬ。しかし近代物質文明の根拠としての、その人類の概念が破れようとしているとすれば、その人類の概念の変更が要求されるのは必然である。すればそれは同時に新しく生み出される人類の概念に相応する新しい自然の概念の確立が希求されることを意味しているのである。